

第5号様式

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 工 学 ）	氏名	溝上 裕二																								
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当																										
<p>論 文 題 目</p> <p>建築プログラミングにおけるプロブレム・シーキング手法の構造特性とワークプレイスを 中心とした適用事例からみたその効用</p> <p>(Study on the Methodology Structure of “Problem Seeking Method” in Architectural Programming and the Feasibility of its Application into Programming Processes involving Workplace Programs)</p>																											
<p>論文審査担当者</p> <table border="0"> <tr> <td>主 査</td> <td>教 授</td> <td>平野 吉信</td> <td>印</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>西名 大作</td> <td>印</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>准教授</td> <td>岡河 貢</td> <td>印</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>准教授</td> <td>千代 章一郎</td> <td>印</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>准教授</td> <td>田中 貴宏</td> <td>印</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>准教授</td> <td>角倉 英明</td> <td>印</td> </tr> </table>				主 査	教 授	平野 吉信	印	審査委員	教 授	西名 大作	印	審査委員	准教授	岡河 貢	印	審査委員	准教授	千代 章一郎	印	審査委員	准教授	田中 貴宏	印	審査委員	准教授	角倉 英明	印
主 査	教 授	平野 吉信	印																								
審査委員	教 授	西名 大作	印																								
審査委員	准教授	岡河 貢	印																								
審査委員	准教授	千代 章一郎	印																								
審査委員	准教授	田中 貴宏	印																								
審査委員	准教授	角倉 英明	印																								
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、建築プログラミングの代表的な手法であるプロブレム・シーキング手法の構造特性を明確化するとともに、本手法を適用した実施事例の分析から本手法の効用を明らかにして日本での建築プログラミングへの適用の可能性を明らかにすることを目的とし、以下の全5章で構成している。</p> <p>第1章「研究の背景・目的及び課題」では、本研究に至る背景及び既往研究、日・米・英における建築プログラミングの適用状況の文献調査等を踏まえ、本研究の目的と課題を示している。</p> <p>第2章「プロブレム・シーキング手法の成立・発展過程と手法構造の特性」では、本手法の成立・発展の中心となった関係者へのインタビューや関連資料の調査・分析を行い、その成立・発展過程及び手法構造の特性を考察している。その結果、①CRS 社が構築した原理・手法要素群に、手法開発を担った W. Pena 氏が自身の実践経験や他分野の課題解決手法にヒントを得て確立した諸概念が導入されたことにより特徴的な手法構造が構築されたこと、②「発見的手法」により創造性の発揮を重視し、プログラミングとデザインを明確に分離しつつも有機的に連結させようとした Pena 氏の思想が強く反映されていること、③普遍的な手法構造を持ちながらも、対象とする建築プロジェクト特性や時代状況の変化に対応できる体系を有していること、を指摘し、本手法が様々な建築プロジェクトに適用できる普遍的な理論と実践の蓄積に裏付けられた手法であるということを明らかにしている。</p>																											

第3章「対象プロジェクトの属性と阻害事象発生傾向」では、日本において本手法を適用したプロジェクト事例を分析し、建築プログラミングが的確かつ円滑に遂行され難くなる「阻害事象」の発生状況をプロジェクトフェイズ毎に検討し、阻害事象の発生傾向と対象プロジェクトの属性との関係を考察している。

第4章「プログラミングの遂行におけるプロブレム・シーキング手法の効用とその構造」では、本手法を適用した事例分析をもとに、第1にプログラミング導入時から実施・ハンドオフまでの間に発生した各種阻害事象とその要因の解決における本手法の効用、第2にプログラミング過程における成果物の生成からみた本手法の効用のメカニズムをそれぞれ明らかにしている。その結果本手法は、①関係者の理解を促進し、経験不足を補う的確な計画立案・実施支援の知識体系として有効であること、②多様な阻害事象に対して、広範かつ臨機応変に対応し解決できる構造、仕組み、ツールを有していること、③「5つのステップ」と「4つの考察」で構成される「マトリックス」がプログラミングに必要な情報の収集、検討、発見、決定のための基幹的な枠組みを与え、「インフォメーション・インデックス」が要素情報を選択し抽出するための有効かつ実務的な指針と手法要素の連続性を確保した実用性の高い「知識ベース」を提供して、本手法の中核的な役割を担っていること、④その手法体系は、今日的な多様な建築プロジェクトにも十分な効果を発揮する実用的な手法であること、について明らかにしている。

第5章「結論と展望」では、各章の結論をまとめ、我が国における本手法の限界と、今後建築プログラミングに求められることに対する本手法の可能性を述べるとともに、「建設後の実施効果の検証」「プログラミングの普及」「手法やツールの改善」という今後の課題について提示している。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（工学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考：審査の要旨は、1,500字以内とする。